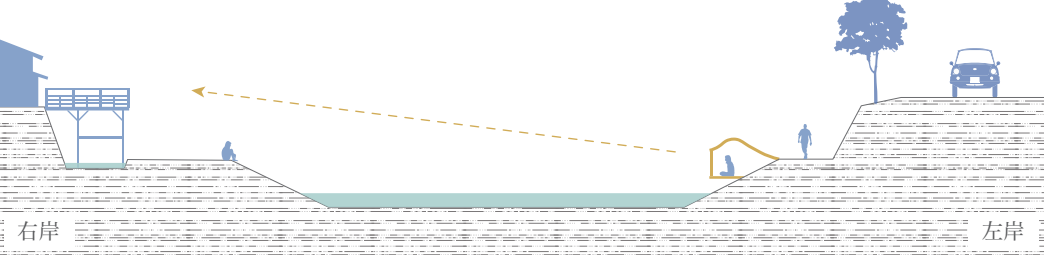
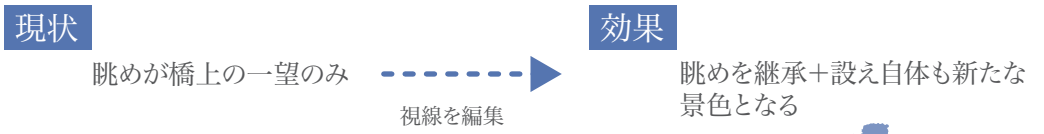


01. 失われた左岸



納涼床は明治になると7・8月に床を出す風習が定着し、鴨川の右岸・左岸の両岸に床が並んだ。しかし明治27年や大正4年には左岸（東側）の床は姿を消し、さらに大正期には治水工事のため床机が禁止、昭和4年には半永久的な床が全面禁止となる。こうした変遷を経ても、京都の夏を象徴する大切な文化であり、この風習を未来へ受け渡していくことが求められる。

02. 伝統を手の届くカタチに



納涼床の風景は、これまで主に橋上からの一望として記憶されてきた。失われた岸に半屋外の縁側を再設置し、対岸の納涼床を額縁に収めた季節の眺めとして継承する。モノを恒久化せず、見る行為と風景の継続性を設計する提案である

03. 750m の舞台



納涼床の対岸に全長約750mの縁側を連続配置し、30m ビッチで開口と階段を挿入。川辺と街路を編み直し、回遊性を高める

04. 伝統材を用いた日常を

